

風の末裔シリーズ・4th シーズンの4

～優しい贈り物～



©西風そら

<http://nisikaze.sakura.ne.jp>

く夏の終わりのく

夕空に雲が早い。

夕立が来るかもしれない。

「降る前に帰り着けてよかった」

ナーガは、湧き上がる積乱雲に追われるように、馬繋ぎ場へ降り立った。

高台の執務室に、自立つ緋色の羽根が見え、その場でヒョンと跳ねてから、テトテトと不器用に走ってくる。

こうして素直に駆け寄って来られると、本当に可愛い！

「ただいまあ、シンリィー！」

両手を広げたナーガの横を駆け抜けて、子供は、いつの間にか後ろに立っていた二人に飛び付いた。

「やあ、シンリィ・ファ!! 久し振り!!」

「ほっぺがぷくぷくしたね。約束通り、好き嫌いはなくなったかな?」

振り向いたナーガも顔をほころばせた。

「シドー! ソラー！」

「ご無沙汰しました、ナーガ様」

「西風の里の夏の祭祀は無事終わりました。まだこちらでお手

伝いさせて下さい」

二人の青年は頼もしい笑顔を見せた。

「ああ、おかえりなさい! まったくシンリィ、僕は空気か? よっぽど君等が好きなんだなあ。妬けるよ」

「空気の有り難みが分かるのは、もうちょっと大人になってからですよ」

ソラの理屈にシドも笑って、抱き上げていたシンリィを下ろした。

「中身も詰まったようだ。ずっしりして来たね。初めて会った時は鶏ガラみただったのに」

この二人がいるだけで執務室が明るくなり、ナーガの肩の荷も軽くなる。シンリィじゃないけれど、ナーガだって抱き付きたい気分だった。

「ナーガ様より、ほんの一寸早くに着いたんです。まだノスリ長様にも挨拶していません」

「回苦しい事は後でいいよ。また僕の家に戻り始めるだろう? 荷物はこれだけ?」

「ああ、それが…」

「ん…?」

「すみません、もう一部屋、要り用になったんです」

「ん、ん…?」

「よっ！ ストーカー男!!」

すんごくすんごく聞き慣れた声が出て、ナーガは眼の中に星を百個キラめかせて振り向いた

「……」

しかし、振り向いた先には誰もいなかった。

「どこを見ている、こっちだ、こっち」

声は下の方からして、視線を約45度下方に滑らせると、そこにミニチュアのモエギがいた。

「モ・エ・ギ・殿…?! 何だってそんなに縮んだんです?!」

「ナーガ様…、しっかりして下さい」

「そんな訳ないでしょう」

「……」

「モエギ様が女の子をお産みになったのは報告したでしょう」

「あ…ああ…」

西風の里と縁遠かった間に、あのモエギがお母さんになった…、ちょっとピンと来ない。

ナーガは、腕組みするこまっしゃくれ娘を見下ろした。

明るいオレンシの瞳に、勝ち気そうな尖った舌、たつぷりとウエーブの掛かった碧緑の髪…と、外見は100%モエギ譲りだ。



「じゃあ、君が、えと…」

「ルウシエルだ。ルウって呼び捨てでいいぞ。ストーカー男」  
「……………」

「ルウシエル様は秋に十歳になります。一度、蒼の里の教育を受けさせたいと、モエギ様が」

「シド、お前もここでは呼び捨てにしてくれって言ったろ？」

「やっと長の娘って名前の付きまとわれない土地に来たんだ。それと、母者に言われて来たんじゃない。私が希望したんだ。自分の意思で来たんだ！」

「…どうやら、中身もモエギの遺伝子で占められているらしい。大変だな、ハトウン……………」

「ああ…はい、えと…、ルウシエル…。何か、馴染まないですね…、『ルウ様』で良いですか？」

「あの～…」

ナーガが片手を上げて遠慮がちに切り出した。

「皆が馴染まない内に、その『ストーカー男』も改めて欲しいのですが…」

「ああ、じゃあ、んーんとお…」

「ナーガでいいですよ」

「『おっぴょ』…」

「それは…勘弁して下さい」

「じゃあ、『うらなり』『あおびょうたん』『一発のさわ男』、どれがいい?！」

あの二人…! 普段からヒトの事、とんだけボロクソに言うてるんだ?!

「…『おっさん』でいいです…」

不満げにツツツ言っているナーガの横をスタスタ歩いて、こまっしゃくれ娘はシンリイの前に立った。

「あんたがシンリイ・ファア？」

シンリイは、ちょっと怯えた感じでナーガの影に隠れたが、ルウシエルはお構いなしに、羽根の子供にズンスン迫った。

「へえ、本当に羽根があるんだな。飛べるのか? 引っ張ったら痛いのか? あんたの父者は大した術者だって聞いた。あんたもそうなのか? 何かやって見せてくれ」

ルウは切れ目なしに喋りながら羽根の子供を追い詰め、後退りするシンリイがナーガの周りを三周半した所で、ソラが水入りにした。

「まあまあ、ルウシエル様、時間は一杯あります。今日はゆっくりお休みになられて、明日にしまししょう」

「ソラ、お前も『様』は抜いてー!」

「それは、出来ませぬ」

ナーガはちよっとビックリしてソラを見た。ミニチュアと言えど、モエギにきっぱり口答えするソラなんて、見た事ない。

「僕は西風の里の外交官です。そのような癖が付いてしまつと、対外の者と話す時、支障があります」

「そっかあ…。じゃあ、しょうがないね」

おお！ ミニチュアモエギが折れた！

ナーガは心の中で目を丸くした。どうやら、ルウにとつてソラは、一目置く存在みたいだ。よし、後でこっそり、『おっさん』を撤回して貰えるよう、頼んどこう。

\*\*\*

皆でナーガのパオに荷物を運んだ所で、パタパタと大粒の雨が落ちて来た。雨衣を羽織って執務室へ行くこととする一同から、シンリィが離れた。

「どうしたの？」

シンリィは空を見て、オウネ婆さんの仕事場の方を見た。

「ああ、エノシラに雨衣を届けに行くのか。ご苦労様、気を付けてな」

シンリィは羽根を翻して、里の奥の家へ雨衣を取りに駆けて行った。

「凄いですね、ナーガ様。すっかり以心伝心ですね」

「おだてないでよ、ソラ。一緒に生活していれば、パターンが分かって来るだけだよ」

「いえ、離れていたホンの一ヶ月程の間に…何と言つか…穏やかな感じになりました」

「えっ？ どっちが？」

「二人の間の空気が、です」

「…僕等、そんな、ピリピリしていた？」

「ピリピリじゃないけれど…、張りつめたモノがありました。水も濡らすまいとする感じの」

「…そう…」

毎日だと気付かないが、久し振りだと、見える変化があるのだろう。僕とシンリィの間…、ちょっとは進展しているんだ。ナーガは少しホツとした。

「あれっ?!」

後でシドが頓狂な声を上げた。

「どうしたの？」

先に立って歩いていた二人が振り向く。

「ルウ様が…、今、後ろを歩いていたと思ったのに…」

シドの前になり後ろになり歩いていたルウが、ヒョンと姿を消したのだ。

「迷子。」

「いや、大人といえるのに飽きちゃったんだ。いつもの事です」

「捜す。」

「いえ、好きにさせて差し上げます。初めての場所でワクワクする気持ちはよく分かりますから。それに、これがあります」

シドとソラは髪を上げて、片耳のピアスを見せてくれた。橙(だいだい)色の小さい珠。

「うわっ！ 懐かし!!」

「ナーガ様から取り上げた石、モエギ様は全部大切に持っていたんですよ。ルウ様の胸にも一つぶら下がっています。石の働きは本人には教えていませんが」

橙色の兄弟石は、同じ石を持つ者の居場所を教えてください。

ナーガがモエギを心配して西風の里に持ち込んだ物だが、お陰で『ストーカー男』の悪名を背負う羽目になってしまった。

「さすがモエギ殿！ 自分の娘の行動パターンを読んでいるね」

「…まあ、あれだけ瓜二つならね…。時々ルウ様を見て、落ち込まれますよ」

そんな話を話している間に、三人は執務室に着いた。

ノスリとホルズは二人の青年の肩をバンバン叩いて、再訪を大喜びしてくれた。

「噂のモエギ殿のお嬢ちゃんに、早く会いたいもんだ」

「すみません。明日には挨拶に伺わせますから」

「所で、お嬢ちゃんは何処で寝るんだ?」

ホルズが机で書類を揃えながら、何気なく聞いた。

「うちの広さなら、奥を仕切ってベッドを入れれば、それなりの個室を確保出来ると思います」

「いかん、いかんぞ。多感な年頃のお嬢ちゃんが、むさ苦しい男三人と寝起きを共にするなんて!!」

ホルズがわざとらしい台詞と共に立ち上がる。

「むさ苦しい…ですか? だいいちルウシエルは九つですよ」

「だからだな、保護者のシドとソラは仕方がないとして、お前は一時家を明け渡してやれ」

「…それで、僕に何処で寝ろっていうんです?」

「あるだろう!! お前の可愛いシンリィのおうちが!!」

「…僕、先に戻ってルウの部屋を作るときです。シド、ソラ、ごめくりー!」

ナーガは稲妻のような素早さで、雨衣を羽織って消えた。

「…。」

キョトンとするシドとソラの横で、ノスリがさすがに呆れてホルズを見た。

「…だから、そういうのが急ぎ過ぎなんだって…」

「どつという事なんですか？ シンリィのおうちって？」

執務室コンビは、二人に、エノシラの存在を話した。

「だからね、今、ナーガは、大っ事な時なんだ。君等も暖かく応援してやってくれ」

「…はあ……」

シンリィは大人用の大きな雨衣を頭上に掲げて、テトテト歩いていった。チビッコなので、普通に着ると地面に引きずってしまつた。

「よっ!!」

横道からさっきの女の子が出現した。

「どつ行くの？ 里の中案内してくれ。子供用の草の馬ってどこにいるんだ？ お前はもう飛べるのか？」

シンリィより頭一つ大きい女の子は、シンリィより百倍動く口で喋りまくりながら、後退りする小さい肩を捕まえようと、手を伸ばした。

途端、シンリィは真っ青になって、身をよじって避けた。避けた拍子にぬかるみで滑って転んでしまった。

「お…おい…」

「何やっつてる!!!」

数人の男の子がバラバラと走って来た。

「お前か」

一番大きい子が、地べたのシンリィを見て、手を伸ばして引っ張り起こした。男の子達はルウをねめ付ける。

「お前…？ どこモンだ?!」

黒死病渦の後、子供は極端に少なくなったので、知らない顔はいない筈だ。しかも見慣れない肌の色？

「私は、今日、西風の里から来たの！ 名乗ってんなら、あんたから名乗りなさい!!」

数人の大きい男の子に囲まれながら、ルウはつま先立って顎を上げた。

「他所モンかよ！ この里には、こいつを突き飛ばす奴なんて一人もいないんだよ！」

エノシラと暮らし始めて程なく、シンリィは修練所に通うようになった。良く出来た教官の指導の賜物が、子供達は、たまに來て授業を受ける真似事をして帰る羽根の子供を、『「ママメツ子」』として受け入れていた。

「突き飛ばしたんじゃない！ こいつが勝手に転んだんだ！」

「謝れよ、シンリィ!!」

「何で、私が！」

「生意気言つな！」

「女の癖にー」

「変な色の目しやがってー」

「…!!!」

ルウのグーパンチが男の子の顔面に炸裂した。西風の里でだつて目の色が彼女の起爆剤な事は、男の子達には知る由もない。

「うっつ!!!」

男の子達は一齐に、一人の女の子に掴み掛かった。

\*\*\*

「…ど、どうしたんだ？ ルウシエル？」

自宅の前でナーガは、鼻の穴を膨らませて胸を張ったルウと、泥だらけでボロボロの男の子達を、ビックリ目で交互に見ていた。

「こいつら、今日から私の子分になった。差し当たっては…」

男の子達は重なり合つて、珍しそうにナーガの家を覗き込んでいる。

「親分は自分の面倒を見なければならぬ。こいつら家に入れて、傷の手当てをして、甘茶と菓子を振る舞つてやってくれ」

執務室を後にしたシドとソラは、前を歩くシンリィと長いおむげ髪の少女を見止めた。

「シンリィ・ファ！」

シンリィは片エクトボで振り向いた。しかしナーガの時と違って、少女にビッターリくっ付いて離れない。

「こんばんは。えと、シドさんとソラさん…ですよね。あたし、エノシラと言います」

「ああ、初めまして…」

「この女性(ヒト)が……」。

シドとソラは、ホルズに言われた事を思い出しながら、少女のぼつちやりしたそばかす顔を、チラチラ盗み見た。控え目そうな外見も中身も、モエギ様とは一八〇度違う感じだ。ナーガ様、好みが変わつたのかしら？

「シンリィ、いつの間にかこんなカノジョが出来たんだい？ 僕達とも手を繋いでくれよ」

二人は何気なくシンリィの手を取った。

次の瞬間、シンリィがついさつき見た強烈な光景が、頭に流れ込んで来た。群がる男の子達相手に、鮮やかな跳び回し蹴りを決める、ルウの雄姿。

…二人は額に手を当てて天を仰いだ。そして溜め息を付いて、同時に片耳のピアスに手を添えた。

「ルウシエル様!!」

二人、息せききつてナーガのパオの入り口を開けて、思わず





また閉めたくなった。

泥だらけの子供達が、縦横無尽に遊び回っている。憐れな次期長殿は、正義の女騎士の名誉ある愛馬役を賜っていた。

二人はまた額に手を当てて天を仰いだ。

遅れて歩いて来たエノシラがやっと到着して、女神の一声を発した。

「こんばんは、ナーガ様。皆、もうお帰りなさいな。今なら兩足が弱いから」

「はあ」

子供達はやっと帰り支度をしてくれて、ナーガは腰を押さえて床に崩れた。

「お前等、気を付けて帰れよ！ 明日から私も修練所の生徒だ。宜しく頼むな！」

「うん、また明日！」

「蹴り球遊びやろうね！」

「秘密基地も行くこうな！」

賑やかな声が三々五々散って…。

「…す、すみません…ナーガ様…」

シドが泣きそうになちっちゃんい声で言った。

「…いや……」

ナーガは床に伸びたまま、エノシラにくっ付いているシンリイをつくつく眺めた。二人の子供、足して二で割れば丁度良いの」…。

「あの男の子達ね、シンリイを助けようと喧嘩してくれたんですよ」  
エノシラが、ナーガに手を貸しながら言った。

「えっ、そうなの？ そんな経緯いきみやひごとく言せせ…」  
「あたしが通り掛かった時は、すっかり皆、ルウの支配下でたけれど」  
皆を見送ったルウが駆け戻って来た。

「シンリイ・ファ！ …それから、えっと、エノシラ！」

「皆とすっかり仲良しになったのね。凄いわ、ルウ」

「シド、私の寝間着を出してくれ。今晚はエノシラの家泊まるー」  
「ええっ?!」

驚く男三人を尻目に、ルウはスタスタとエノシラの前に進み出た。

「エノシラ、良いだろ、泊めてくれ」

「あら、いいけれど…、来たばかりでしょっつ」  
「だって、まだ、シンリイ・ファを子分にしていな

「子分？ シンリイは子分になれって頼めば、断らないと思うわっ」

「そんなの、子分じゃないー」

ルウは真面目な顔で口を尖らせた。

「私はこいつと何も知り合えていない。それじゃ親分にも子分にもなれなす」  
「そういうモノなの？」

「父者ててじゃが言っていた。よく知り合いたい相手とは、殴り合つか、一晚共にするかだ」と

「…それ！ 多分！ 意味が違う!! ハトウンッ！ 子供になんちゅー話してんだあ〜!!」  
男三人アゴがハズしている横で、エノシラはシレットと言った。

「そう…、シンリイ、貴方、どうなの？ ルウと一晚いれば、知り合えるのかしらっ」

シンリイはエノシラの服の裾を掴んで、どこ吹く風でホンツカしている。

「ルウ、シンリイはね…」

エノシラはしゃがみ込んで、女の子に視線を合わせた。

「身体だけ側にしても駄目なの。心が近付いてくれないねば」  
「っっっっっっっ」

「逆に言えば、心さえ側にいねば、身体は遠くでも構わないの

「お」

「ん？…分からない…、エノシラ」

「無理して今日泊まりに来なくてもいいって事よ。心配しなくても、シンリィはきつとすぐ貴方の子分になるわ。そしたら喜んでうちにご招待するわ。その方が楽しいわよ」

「うん…」

「それに、来て早々、貴方と過ごす機会をなくしたら、ナーガ様がきつと凄くガツカリなさるわ」

「ああ、それもそうだな、…分かったー！」

「おお！ ルウが説き伏せられた!!」

ナーガは驚愕し、シドとソラは胸を撫で下ろした。

初日からうっかり目を離して、エライ事になってしまった。

これ以上他所様に迷惑を掛けられない。

「…さあてと…」

エノシラは腕捲りして、室内を見回した。

「この泥々をお掃除しましょう。あたしは掃き掃除するから、

ルウとシンリィは雑巾掛けね」

「ええ〜」

「ええも何も、計画したのなら後片付けまでキチンとやりましょう。男の子達を一時ここに避難させるって言い出したのはル

ウでござい。」

「え〜」

エノシラは掃除道具を引っ張り出して子供達に渡しながら、ナーガ達の疑問顔に答えた。

「さっきまで、シンリィと一緒に、各家を回っていたんです。

助けて貰ったお礼を言いに。それで、男の子達は泥々で帰って

も、叱られなくて済むでしょう？」

「親分は子分を助けなくてはならないんだ」

ルウはちょっと罰悪そうに俯うつむいて、生まれて始めての雑巾掛けに不器用に勤しんでいた。

「あ、シドさん、ソラさん、玄関の敷物、外で叩いて…、ナー

ガ様、窓開けて下さいな」

「は、はい…」

真の大親分、ここにあり…。皆、そばかす娘に言われるまま立ち働かされ、シドとソラはそっと目配せした。前言撤回、やはり、ナーガ様の好みは、変わっていない…。

〜西風の娘〜

「行つくぞお！」

修練所の広場に元気な声が響き、ルウが子分達と蹴り球遊び

をやっている。シユロの葉を固く巻いた球を蹴って奪い合うのだが、ルウの脚技は、里のどの男の子にも負けない見事な物だった。

「誰かルウを止めろ！ ゴールを守れ！」

「へへん！ お前等に追い付かれる程ノロマなもんか！」

ルウは球を高く蹴り上げ、仔狐みたいにジャンプして、この日七回目のゴールを決めた。

「するいよー、ルウのチームはハンデ付けてよ！」

「おっ！ そっちはゴールをちっちゃくしていいぞ！」

里へ来て三日目…、既に里で生まれた子供みたいに馴染んでいる。

「この馴染みっ振りは、ユーフィ以来かもしれんな…」

所用で修練所に顔を出したホルズは、若い男性教官と共に、昼休みの子供達の様子を見学していた。

「おーい！ シンリィ・ファア！」

ルウは、土手をフヨフヨ歩いているシンリィを目ざとく見つけた。

「お前も来い！ 一緒にやろう！」

しかしシンリィは、歩くリズムを崩す事なく、校舎の方へ向かっている。

「おーい！ 聞こえないのか！」

大きい男の子がルウの肩を叩いた。

「ルウ、シンリィは駄目だよ！」

「どうしてだ？ 下手くそでもハンデを付けてやればいいだろう！」

「いや、違う。あいつ、羽根が大き過ぎて、重心高くてすぐ転ぶんだ。危ないから、激しい遊びには誘うなってセンセが…」

「……………」

「ルウ、早く始めようぜ！」

「悪い、抜けるからあとよろしくー！」

ルウは球を他の子にパスして、土手に向かって駆け出した。

「そんなあ…、おい、ルウ…！」

「シンリィ、シンリィ…！ 待てたら！」

ルウは走ってシンリィの前に回り込んだ。

「悪かった。羽根がそんなに重いなんて、知らなかったんだ」  
シンリィは前を塞がれたので、困ったように立ち止まった。

「なあ、付き合っから蹴り球の練習しないか？ 仲間外れじゃつまないだろ？ 走れなくなったって、パスが上手くなれば…」

ルウが一步前に出て肩に触れようとした途端、シンリィは身を縮めて飛び退いた。そして、ルウを大きく迂回して、校舎に向かって不器用に駆けて行った。

「振られちゃったな」

教官と土手を歩いて来たホルズが、上げた手のやり場に困っているルウに声を掛けた。

「私は…、何で、シンリィに嫌われているんだろう。いつも私に触ろうとすると、凄いい勢いで逃げるんだ…」

「ああ、それは気にしなくていいんだよ。ルウが嫌われている訳じゃないから」

若い教官がルウの肩を叩いて、校舎の入り口を目で示した。

昼休みを終えた女の子達が、可愛いお弁当袋を下げて、ワキヤワキヤと立ち話をしている。シンリィはそこに近寄れなくて、足踏みして待っている。

「シンリィが修練所に来始めた頃は、女の子達があの羽根に触りたがって大変だったんだ。お陰で今は、女の子の周囲十メートルには近寄らない」

「どういふ事？」

「やっこさん、女の子に触られるのが大っ嫌いなんだ。まるで魂でも吸い取られるみたいに」

ホルズが肩を竦めて言った。

「女の子？」

「そう、里へ来た最初は俺の妹が世話していたが、奴は身をよじって嫌がったんだ。他の事には無頓着な癖に、そこん所だけ

は異常な嫌がりようだったらしい」

「だって、エノシラにはビッターくっ付いているじゃないか」  
「そうだよな…、くふふ…」

ホルズは妙な含み笑いをした。

「あれ、ホルズ殿は理由をご存知なのですか？ だったら教えて下さい。子供達を指導して行く上で、知っておきたい事です」

今年から新任の、いかにも体育会系な若い教官は、名をサオと言ひ、いつも子供達に対して全力投球だ。シンリィを修練所に通わせるのにも、たいそう尽力した。真面目で感激屋で、びっくりする程前向きな方なんですよ…とは、エノシラの弁だ。

「理由も何も、ただの遺伝だよ」

「い、遺伝？」

「そう、あの、女という生き物に対する嫌がりっ振りは、父親のカワセミの若い頃そっくりだってさ。気に入った女の子にだけ極端にベッターするのさ」

「……………」

「齢よわいせつにして、大したモンだ」

「はあ……………」

「納得行かない!!」

それまで黙って聞いていたルウが叫んだ。

「それじゃ私も、その辺の、ワキヤワキヤと羽根に触りたがる女の口と同じなのか？ あいつにこつてー！」

「まあ…そうなるかな？」

ホルズが、ルウの突然の怒りっ振りに目を白黒させて答えた。

「許せん！ あいつ…あいつ!! バカにしやがって!! もう知らないっ!!」

ルウは肩を怒らせて、ズンズンと反対側に降りて行った。

「…女の子って難しいな…」

「難しいですね…」

予鈴が鳴って、男の子達は球を蹴りながら戻って来て、女の子達もお喋りを止めて散り、シンリィはやっと校舎へ入れた。

教官は目を細めてその様子を眺めながら、ホルズに向いた。

「シンリィは自然科学が大好きで、毎週この時間には必ず来るとですよ」

「へえ？」

「ホルズ殿…、里の皆は色々噂しているけれど、あの子は、脳みそが欠けてなんかいないと思いますよ。ちょっと繋がり方が違うだけなんです」

「うむ…」

最近、シンリィと執務室にいる事が増えたホルズも、その意

見には賛成だった。ただ、その事に慣れるのに、周りの大人にちょっとびりな努力が必要なだけなのだ。

\*\*\*

修練所の放課後。ルウは、数人の男の子と、厩の裏の小馬場に来ていた。

馬を円運動させたりするちょっとした場所だが、今は西風の里の馬が放馬されていた。シドの青毛とソラのパロミノ、それにルウの粕鹿毛。

「わあ、本当に草の馬と違う！ これが西風の馬？ 人間の馬みたいに、どっしり遅いね」

「ああ、能力も、人間の馬に近い。こいつで飛ぶには、馬もヒトも特別に修練しなきゃ駄目なんだ。私はまだ上手く飛べないから、シドに手助けして貰ってここまで来たんだ。シドは里で飛ぶのが一番上手い。宙返りだって出来るんだ」

男の子達は珍しげに、ルウの引き寄せた粕鹿毛にベタベタ触った。草の馬と違った感触が新鮮みたいだ。

「あれ…？」

ルウは馬房を隔てた向こうの入り口に目が止まった。覚えのあるおさげ髪の後ろ姿が、厩係と何やら話している。

そういえば、エノシラは『シンリィはすぐ子分になる』って言っていた。子分どころか、触らせても貰えない。一言文句を

言ってやるうと、近付いた。

「君も大変だなあ」

「そんな事ないです。鞍、これ使っていますか？」

「あの子、どこで迷子になっているか、見当付いてるの？」

「放牧地の境界の境目に羽根が落ちていたから。前にもそんな事、あったんです」

「待ってね、今、君の馬を出して来るから」

ルウは二人に見つからない内に取って返した。小馬場に戻る  
と、大急ぎで自分の馬に鞍を置く。

「どうしたの？ ルウ」

「急ぎの用事が出来た。また明日な！」

「えっ?! そんなあ……」

びっくり顔の男の子達を取り残して、ルウは粕鹿毛に跨がり、  
小馬場の柵を飛び越え、向こう側の境目まで一気に駆け抜けて、  
境界を超えた。

エノシラ達の話だと、どうやらシンリイが里を出ちまって、

迷子になっているらしい。ここでエノシラより先に見付けて助  
けてやれば、きっと私に一目置くに違いない。少なくとも、そ  
の辺の女の「と」一緒にしたりはしなくなるだろう。

ルウは一人では飛べないが、多少のジャンプなら出来る。少  
しの高度があれば、徒歩で出た子供を見付けるのは、容易たや  
すい。

しかも、緋色の羽根は少し小高い丘にいたので、すぐ見付か  
った。

「おーい！ シン…リ…ィ…?」

ルウの呼び掛けは、尻すぼみになった。その小さな丘の玉砂  
利の上に、羽根の子供は一人ではなかったからだ。

夏の終わりのくすんだハイマツの原に、鮮やかな夏草色の馬。  
そして、大きな白い羽根を背負った女性…。

地上に着地したルウは、馬から降りるのも忘れて、茫然と眺  
めていた。ルウをじっと見つめるその女性の、この世のものじ  
やないみたいなきらびに、圧倒されている。

「シンリイや、ちょっと若過ぎやしませんか？」

女性は、音もなくすうっとルウに近寄った。

「ナーガのお相手としては…」

「おっさんの?！」

ルウは弾かれたように馬から飛び降り、身構えた。

「冗談じゃない!!」

微妙な笑みを称えながらルウを見やる女性の袖口を、シンリ





「西風のルウシエル。シンリィを探しに来てくれたのね、有難う。貴方の母君のお話は、昔から何度も聞かされてきました。お逢い出来て、とても嬉しいわ」

「あ、ああ…。もう、行っちゃまうのか？ 息子に会って行かないのか？」

女性はそれには答えず、ルウに歩み寄って、同じようにキスをした。何だかホンワカした気分になった。

「では、エノシラ、頑張って下さいね。貴方は本当に素敵な方。お逢い出来て良かったわ」

「いえ、こちらこそ、勇気を頂きました。感謝します。有難うございました!!」

女性は乗馬すると一瞬で上空に舞い上がり、彗星のように見えなくなった。

「シンリィ…」

ほわっと空を眺めている子供に、エノシラが近寄る。

「帰ろう。ルウも帰ろ…」

今の感じから推測すると、シンリィはおっさんの母者に頼まれて、エノシラを誘い出したのだらう。でもエノシラはそんな事、一言も突っ込まなかった。

優しいから…？ 違う気がする。

突っ込む必要を感じていないんだ。何でもあるがままを受け入れる。エノシラってそういうヒトなんだ…。

ルウは、二人の乗る草の馬の後ろにくっついて飛びながら、一人で色々考えた。言葉を多く使う程、相手が遠くなる…、そんな場合もあるんだ…。

\*\*\*

「おや、珍しいですね」

馬繋ぎ馬に降り立ったナーガをエノシラが出迎えるのは、珍しい事ではない。しかし今日は、いつもべったり張り付いている羽根の子供がいなかった。

「シンリィは執務室にいます。あの…、あたし、ナーガ様にお伝えしたい事があるんです」

「えっ？ 僕に？」

いつになく張り詰めた表情の少女に、ナーガはドギマギした。少なくとも、シンリィの服を洗ったら縮んじやいましたあ…、とかとは違う類いの話みたいだ？

「そんなに落ち込んでいたって仕方がないでしょう」

風出流山(かぜいずるやま)の神殿。

下界から戻ってずっと、テーブルに突っ伏してドヨンとしている妹に、大長は困り顔で話し掛けた。

「なるようにしかならない事なんですから。貴方のせいではないですよ」

「でも、余計な事をしてしまいました。ああ、やっぱりワタシ、下に降るモンじゃないんです」

兄は、落ち込む妹の肩に手を置き、天井を向いて嘆息した。よりによって、やっと、たまに山を降りる気になってくれた時に…。

「…えーと…」

ノスリとホルズの執務室コンビは、上手く呑み込めなくて、三回聞き直した。

目の前には、前に組んだ指をモジモジさせるエノシラと…、何故か隣には、修練所のサオ教官が立っていた。

「もう一回、順を追って、説明してくれるか?」

ノスリが額に手を当てて、何回聞いても同じであろう答えを再度聞いた。

教官が、緊張して裏返りそんな声で答える。

「はい、私には目標があります。尊敬するフィフイ教官のように、里の寂しい子供達の居場所になれる、暖かな家庭を作る事です。そして、その目標達成の礎(いしずえ)となる生涯の伴侶は、このピトシカイない!と、一目会った時、天啓のように

閃いたのであります」

「そ、それで…エノシラ…、君は、彼の申し込みを…受けたっというのか?」

「はい…」

エノシラはまつ毛を伏せて、はにかみながら答えた。

「あたしは修行中の身だし、所帯を持つなんて、まだまだ先だと思っんです。でも、あたしがシンリイのお母さんをやって以上、長様方にきちんと報告しなければ…と思って。ナーガ様には、さっきお伝えしました」

「ああ…そう…」

ナーガが里に戻っているのに、執務室に顔を出さない理由が分かった。

「しかし…、その…、急だな…」

ホントに…ホントに、ノスリとホルズにとっては、晴天の霹靂(へきれき)だ。いつの間に、そんな事態が進展していたんだ?

「そうか、女の口って『擬態』するんだった」

「なんだそりゃ? 親父」

「あとでゆっくりな…」

「最初、ナーガ殿の決まったお相手かと思っていたのです。シンリイを引き取る位だから。一目惚れした途端、失恋かあ…と、

勝手に落ち込んでいたのです。でも、別にそうでもないって聞いて…、思わずその場で、告白してしまいました」

「サオセンセに申し込まれて…、ずっと悩んでいたんです。あたしなんかでいいのか？　って。でも『あるヒト』に逢って、勇気付けて貰ったんです。誰だって生涯半人前なんだって。うじうじしていても一歩も前に進めませんよって」

誰だあ〜?! そんな余計な手助けをしたのはあ!!

再び、風出流山の神殿。

「だって…、告白されて悩んでいるって聞いて、てっきりナーガの事だと思ったんですもの。で、応援するつもりで励ましているうちに、どうやら別の相手だと気付いたのだけれど、もう話を戻す訳にも行かず…」

「はあ……」

やっぱり、ナーガ・ラクシャ竜王に、エノシラ(宵待ち草)じゃ、縁がなかったようですね…。

大長も妹の背中を優しくポンポン叩いて、何とも言えない気持ちになった。

始まる前に終わっちゃうのは、家系なんでしょうかねえ…。

シンリイを連れて外を一周して来たシドとソラが執務室に戻

ると、サオ教官が熱く語っている最中だった。

「私も、まだまだ子供達に教えられてばかりの未熟者です。でも、ノスリ長様みたいに、広い懐で子供たちを包み込める『お父さん』になれるよう、精進します」

そう言われてしまうと、ノスリもホルズも、この情熱的な若者を応援せざるを得なかった。ああ、何であの唐変木には、こいつのバイタリティの十分の一もないんだあ?!

「執務室に行かないのか?」

里の奥の放牧地の土手に座り込んでいたナーガは、暗がりから急に声を掛けられて、飛び上がった。

オレンジの瞳の娘が、両手に饅頭を持って立っている。

「腹減ってるだろ。ソラが、あんたに持って行って」

「……そんなに心配しなくてもいいのに……」

ナーガは膝を抱えて正面を向いたまま、ボソツと言った。

「ちょっと驚いたけれど……、僕は…皆が焚き付ける程には、彼女に思い入れがあった訳じゃないし……」

「……………」

「ただ、シドやソラに気を使われたり、ノスリ長やホルズに呆れられるのが、しんどいだけで……」

「……………」

「ホント、しんどい……」

ナーガは両腕の間に鼻から下を埋めてしまった。

「…分かるぞ」

「ふふ、…この世に九年しか生きていない君が？」

ナーガは、いつもの彼とは違う投げやりな言い方をした。九つのルウの前で、大人でいる余裕もなくす位。

ルウは暗闇で表情が分からなかったが、前に進んでナーガに饅頭を差し出した。

「腹減ってるからしんどさが増すんだ、食え！」

それからもう片手の饅頭を頬張りながら、ナーガの隣にドスンと腰掛けた。

「私は、蒼の里が好きだ。九年生きて初めて、思いつきり子分達と遊べる」

「そつなのっ？」

「西風の里でも、自分はいるけれど、長老達がうるさい。あの子と遊ぶな、この子と付き合つな」

「ああ、言いそうだね。…そっか、そういう意味で、ルウと僕は同士か…、ふふ」

ナーガの笑いは自虐的だったが、ルウは構わず続けた。

「西風の里はね、今、子供の半分が、砂の民との混血なんだ」

「……………」

「その中で風を使える子は半々…。私も、長の能力があるかどうかは怪しむ」

「……………」

「それで、長老達は言うんだ。これ以上、長の血を薄めてくれるな！」と

「……………!!」

「それを言われると、母者は暗い顔になる。庇ってはいくれないぞ」

ルウは饅頭の最後のひとかけを飲み込んだ。

「だから、父者と母者が困らないように、私は…、将来共にする者は、長老達が定めた相手がいい、って決めている」

「…そんな……」

ナーガは身を起こして、九つの女の子を見た。

「だから、今は目一杯遊ぶんだ。好きな事を一杯して」

ルウは草を払って立ち上がった。

「饅頭食ったら執務室に行った方がいいぞ。皆、おっさんの顔を見るまで、帰れないんだ」

駆け去る女の子を見ながら、ナーガは穴があったら入りたい気持ちになった。

九つの子供の方が、自分よりずっと大人だ……

〳秋の初め〵

その朝は、いきなり冷え込んだ。

夜が白む頃から、ルウシエルは目が冴えていた。

そおっとベッドを抜け出し、仕切りの御簾を開けると、シドとソラ、それにナーガの三人が、ベッドにも入らず、甲虫の幼虫みたいに床に丸まって寝入っていた。枕元には、タバノスリ長が差し入れたウォッカの瓶が転がっている。

三人が酒をチビチビやりながら毛布を被って、失恋大告白大会をやっていたのを、ルウは知っている。最後の方、シドとソラがハトウンに決闘を挑んでギッタギタにされた件くだりごまでは、寝ている振りをして聞いていたが、同じ話がグルグル回り出したので、飽きて眠ってしまった。

失恋って、どんななんだろう？ あんまり経験したくないと思っていたが、こんな風に、後々になって甘く酸っぱく語れるのなら、いっぺん位はいいかもしんない。

自分のベッドの毛布を引っ張って、三人に被せて外に出ると、ミルクのような濃い朝霧だった。里はまだ目覚めていない。

「母者は寒くなる前に帰れって言っていたけれど、雪って見てみたいなあ」

何となくそろそろ歩いていると、遠くに見慣れた緋色が横切った。

「……シンリィ……」

ミルクの海の中、ルウは見失った見えたりする子供を、泳ぐように追い掛けた。

「あっ！ おい!!」

緋色の羽根は一直線に結界の境目へ向かっている。

「駄目だよ、また外へ出ちまう」

追い付いて、手首を掴んだ瞬間……!!??、辺りの霧が一気に身体に突き刺さった。強烈な寒気?!

「シン……リィ……?」

振り向いた子供は、水色の睫毛をふせて、とんでもなく心細い顔をしていた。無表情が多い中、こくたまに笑ったり怖がりするシンリィだが、『泣き出しそう』なのは初めて見る。

「シンリィ？ どうしたんだ？ まさか……」

エノシラの婚約にダメージを受けたのは、ナーガばかりではなかったか？

シンリィは目をふせたまま、またズンズン歩き出した。

「待てったらー!」

ルウはシンリィの正面に回った。

「エノシラが好きだったら、素直に祝ってやれよ」



両手をシンリィの肩に掛ける。その時また、ルウの胸の真ん中に、とてつもない寒さが雪崩れ込んできた。

「何でだ…？ どうして…？」

ルウは、息の詰まる冷気にクラクラしながら、シンリィを見た。シンリィは今度は身をよじらずに、肩に掛かった彼女の腕に、そおっと手を添えた。

その途端、ルウには分かった。

二人が持つ共通の心の穴。里の中であやふやな自分の居場所を見失う怖さ、大勢の中なのに独りぼっちになる寂しさ。それが同調して、二人触れると凍えてしまうんだ…。

「ルウシエル、どうしたの？ こんな朝早く…？」

放牧地の近くに住む子分の一人の男の子は、早朝いきなり訪ねて来たルウにビックリして外に出て来た。

ルウの表情はいつになく固く、唇は紫だ。その手にはシンリィの手がしっかりと繋がれている。

「ああ、一つ頼まれてくれ」

「え？ …うん…」

「悪巧みじゃないから心配すんな。エノシラがシンリィを探していると思うから、『今日は一日ルウと一緒にいる』って伝えてくれ」

「ああ、うん、分かった」

男の子はホッとして頷うなずいた。

「感謝する」

ルウは男の子の腰に手をやって、両頬にキスする真似をした。

「わっ？ な、何すんだ?!」

「最近流行りの挨拶だ」

ルウはウインクして、シンリイの手を引いた。去りかける二人に、男の子は声を掛ける。

「ねえ、ルウ。じゃあ今日、シンリイも連れて行くの？ 里の

外の課外授業」

「ああ、私の馬で二人乗りでな」

二人はそのまま薄くなりつつある霧の中を歩いて、既へ向かった。そして、粕鹿毛を引っ張り出し、人々が起き出した里をそおつと後にした。

「だから、一日、課外授業に参加していると思っていたのに!」

夜の執務室。

シドとソラが焦然と見つめる机の上には、橙色の珠のネックレスが乗っている。さっき課外授業から帰った男の子の、腰のポケットに入っていた物だ。彼もそんな物が入っているのを知らなかった。

サオ教官とエノシラも茫然としている。

「ルウシエルは気紛れだから、急に授業に出る気がなくなったんだろうと…」

「シンリイは、ルウと一緒に課外授業に行っているとはかり…」

「とにかく!!」

ノスリが大机の向こうで腕組みして言った。

「あの二人が計画的に里から逃避行したのは確かだ。皆で手分けして探すんだ」

「待って下さい」

御簾を上げて、今しがた外から戻ったナーガが入ってくる。

後からホルズが続く。

「話はホルズに聞きました。ルウはお転婆だけけど、きちんと筋道のある子供です。何か、理由があるんです」

「理由があってもなくても、危険は待っちゃくれない。探すが先だ」

ノスリの言葉に皆、頷うなずく。

「僕が行きます」

「お前一人ですか?」

「僕の血で、探せます」

「あ…ああ」

ナーガの術は、同じ血を持つシンリィの気配を察する事が出来る。

「二人が里を出たのは早朝だ。大分離れちまつてるぞ」

「距離があっても、方向は違(た)がえません。…北とは違つ?」

…南…南西…?」

額に指を当てて集中に入っている時期長に、皆はもう託すしかなかった。ナーガは止まり木から、鷹を肩に移した。

「見つかり次第、鷹を飛ばして連絡しますから」

執務室を出て馬繋ぎ場へ急ぐナーガを、シドとソラが追いつけた。

「やっぱり僕達も行きます!」

「ルウ様がこんなに迷惑を掛けて、じっとしてなんかいられますん!」

ナーガは立ち止まって、ゆっくりの振り向いた。

「迷惑だなんて思っていないよ。それに…」

何とも危うい顔で、二人を見る。

「僕等、ルウシエルの事をどれだけ分かっていたんだろつ?」

シド、ソラ…、僕が一人で探しに出るって言ったのは…、ルウがもし、もしもだよ…、西風の里に帰りたくないなら、好きにさせてあげたいと思ったからなんだ」

「えっ?! えええっ?!」

「ナーガ様!! 西風の里の事、考えてくれないんですか?!」

「うん、ごめん…。西風の里は大切だけれど…。今はルウの気持ちをお先にしましょう…ごめん…」

「でも、それなら尚更、一緒に行かなきゃ。行ってルウ様に言っただけじゃ。ルウ様は西風の里…僕等にとつて、大切なヒトだよ、つて。行く事で示してあげなきゃ」

ナーガは静かに、シドの手のネックレスを指した。

「シド、ソラ…、ルウはその橙色の石の秘密を知っていたんだよ。分かっている、君達の手の中にある事を受け入れていた。でも今は、置いて行った。君達の…、西風の手から抜けて」

「……………」

二人、黙ってしまった。

生まれた時からずっと見て来たルウシエル…。でも、ずっと側にいたから、分からなかった事があったのかもしれない…。

\*\*\*

里より遠く離れた山沿いの草原。

夜闇に光る沢山の目が、ゆっくり輪を縮めている。その輪の中に、羽根の子供とオレンシの瞳の娘。そして怯える粕鹿毛。

——バシィッ!!



輪の一角で衝撃波が炸裂し、目を光らせて獲物を囲んでいた狼達が、怯んで後退りした。

「シンリィ、もう一発だ!」

地面にひらりと着地しながら、ルウが叫ぶ。

シンリィは真剣な顔をして頬を膨らませ、両手を合わせて風を作った。掌の間に出来た風が、ブンブンうなる塊になる。

「よし、上げる!!」

シンリィが投げ上げたそれを、ルウはジャンプして、空中で半回転しながら体重を乗せて蹴飛ばした。風の球は見事なコントロールで、狼の親玉の鼻先へ一直線に飛んだ。

「ギャウン!!」

炸裂した風に跳ね飛ばされ、狼達はとうとう諦めて、パタパタと退散して行った。

「おととい来やがれ!!」

ルウは自慢の脚で空を蹴りながら、狼に対して毒づいた。

後ろでシンリィがフウフウ言ってる座り込んでいる。

「ん? 大丈夫か? お前、さすがだな。あんな風の蹴り玉、作れるなんて」

ルウはシンリィの腕を抱えて助け起こし、粕鹿毛に歩み寄った。

「お前も怖かったよな。心配すんな。二人とも私がちゃんと守ってやる」

それから乗馬してシンリィを前に乗せ、狼につけられない距離まで大ジャンプした。

「シンリィ、お前の行きたい所はまだ先なのか?」

里を出ようとしていたシンリィには、明確な目的地があるみたいだった。この間のハイマツの丘よりも、もっと遠くを彼は目指していた。

ルウシエルは、その場所に彼が行く事を、手助けしようと思っただ。何か理屈がある訳でもない。

生まれた時から一見自由で、実はそんなに自由でもなかった自分が、初めて枠を越えて、やってみようと思った事…。

「こんなに遠かったのか? まったく私がいなけりゃ、歩いて来るつもりだったのか?」

ルウは呆れてシンリィの後ろ頭をこすいた。シンリィは抵抗もせず前後にゆらゆら揺れる。

地上に降りると、自分は下馬して徒歩で手綱を引いた。粕鹿毛はいい加減疲れて、二人乗りが厳しくなって来たからだ。それを見たシンリィも降りようとした。

「お前は乗っている。歩くのが遅いんだから」

グズグズしていたら、里ではもう家出がバしてんだろし、捜索隊に追い付かれちゃう。

ルウはシンリィを鞍上に押し返して、スタスタ歩き出した。歩くのなんて平気だ。自分で決めて、この子供を行きたい所に行かせようって思ったんだ。それは、西風の里で、いつも何処かへ行ってしまいたかった自分と重なったからなのかもしれない。

丘陵が平地になり、遠くに石積みみの建物群が現れた。かなり広いが、人は住んでいない。廃墟の街だ。

街を右手に見ながら西へ進むと、小さな森があった。シンリィがホウッと小さく息を吐く。

「ここか？ 目的の場所は」

ヒトの踏み入る森ではなく、鳶が絡まり、下生えがかなりキツイ。

「森の中へ入るのか？ 馬じゃ無理だ」

歩き通しの馬は、もう相当に疲れて、首を下げている。二人は馬を繁みに繋いで、うっそうとした森に徒歩で分け入った。

「なあ、シンリィ」

木々の間の僅かな月明かりを頼りに、ルウが鳶を切り開く。

「朝みたいに、いきなり触れると寒気がするから、私の手を避

けていたのか？」

シンリィは黙って、ルウの切り払った鳶を後ろへ追いやっている。

「……お前に言葉が要らないのは分かったよ。だけれど私の戯言を聞いてくれるか？」

シンリィは返事をしなかったが、ルウは構わず続けた。

「西風の子供達は、触れる事で心を通わす事が出来る。純血の子供程、その能力が強い。でも私は皆と触れ合うのが怖かった。強がって、自分を従えていても……。自分だけ通じ合えないんじゃないかって……、怖かったんだ……」

不思議だ。父にも母にも打ち明けた事なのに……。

「たとえ凍え死にしそうになっても、お前と通じ合えて、……嬉しかった」

不意に目の前が開けた。

森の中に広場があった。丈の高い草に覆われているが地面は平らで、過去に人為的に整地された感じだ。

広場の真ん中には、一本の曲がりくねった巨木が立っていた。周囲の木々がまだ緑の残る初秋の装いなのに、その木だけ冬のように寒々としている。寿命が尽きかけているんだろう。

しかし、てっぺん近くに生きている枝があり、申し訳程度の

葉の中に、黄色い実が幾つか見えた。

シンリィはそれを見上げ、老木の根本に近付いて、小さい手で幹にしがみ付いた。

「お、おい……」

子供は不器用に木に登ろうとするが、如何せん、羽根が荷物で危なっかしい。

「あの実が欲しいんなら採って来てやるって。待ってる」

靴を脱いで幹に足を掛けようとするルウの腕に手を添えて、シンリィは梢をじっと見た。

「自分で、採りに行きたいのか……」

「ほら、もうぢゅい右だ、そっちに足掛けて」

懸命に幹をよじ登る子供をすく下でサポートしながら、ルウもゆっくり木に登っている。って言うか、ほとんど押し上げてやっている。本当に、自分でも呆れる程この子供の言いなりだ。

「よし、もう届くぞ。支えてるから、手を伸ばせ」

ルウが膝を抱えるように支え、シンリィは枝の上につま先立って、黄色い実に手を伸ばした。

大きな実がちゅちゅい指に包まれて、パチンと枝から摘み取られた。それを懐に入れ、もひとつ上の実にも手を伸ばす。

「欲張りだな」

ルウは苦笑した。『欲』という言葉なんて、シンリィからは程遠いと思っていた。

一二つ目を懐に入れ、シンリィはある事か、更に上の実にも手を伸ばす。

「おい……、もういいじゃないか。あまり欲張ると……」

枝が大きく揺れた。伸び上がったシンリィが、羽根でバランスを崩したのだ。

「ああっ!!」

後ろに倒れる子供を、ルウは咄嗟に背後から抱えた。しかし足が幹から離れてしまった。

——お・ち・る——!!

\*\*\*

……………つ……つ……

落ちたのは確かだ。

ここは地面だ。仰向けの空に三日月が浮かび、さっき迄いた梢が、大きく揺れている。

腕の中に硬直したシンリィ。伸ばしたまんまの手に、しっかりと三つ目の実。……まったく……。

「あいたたたた……」

思いも寄らぬ声に、ルウはシンリィを落つこととして跳ね起きた。

「おっさん?!」

ナーガが二人の下敷きになって、大の字で伸びていた。

「な、なんで、(ここ)?!」

「なんでって…、なんで、僕が追い付けないと思ってるの?」

「……………」

「とおに二人を見付けていたけれど、君達の目的が分からなかったから…」

「…監視してたのか?」

「そついう言い方もあるけれど…。やりたい事を気が済むまでやって貰おうと思っただけだよ」

ナーガは腰をさすって起き上がった。

この場所に来るのは初めてだが、ここがどういふ場所なのかは知っている。

里を出奔した妖精の子供が、この地の未来(さき)を想いながら、自分の道を模索した場所。または、運命に逆らわなかった少年が、生まれて来た意味に出逢えた場所。

そして……………

「(と)っして、(ここ)に来たの?」

「いや、私じゃない、シンリィが…」

当のシンリィは、ルウの膝から落っこたされて、今やっと起

き上がった所だ。ナーガを見て、このタイミングでビックリしている。

「シンリィ、(ここ)を知っていたのか?」

次の瞬間、シンリィは、シンリィとは思えない早さでルウの肘を引っ張って、ナーガから離れた。

「お、おい、シンリィ…」

一瞬傷付いたナーガだったが、すぐにシンリィが逃げた理由に気付いた。

——不穏な邪気——?」

いきなり月明かりが増し、ナーガの影が形を崩して、グン!! と伸びた。それはモヤモヤと立ち上がって形を成し、巨大な黒い虎となった。真っ赤な口と首回りの毛先から気炎が立ち上る。

「異界の魔力!!」

どこで憑かれていたんだ?

迂闊を悔やんでいる暇はない。虎はギロリとナーガを見ている。幸いだ。

「二人とも、そおっと逃げろ」

ナーガは剣を抜いて立ち上がっ……………

「あ? あれれ?!」

身体中の力が抜けて、膝が折れた。剣を持ち上げる握力すら

なくなった。なんでだ？ 黒虎の呪力？

「そ・そんな馬鹿な!!」

虎は舌なめずりして動けないナーガに近付く。

——!!——

目の前を薄緋色の羽根が覆った。

シンリィが両手を広げて、ナーガの前に立ち塞がったのだ。

嬉しい！ こんな時だけど、死ぬほど嬉しい!! だけどこのままじゃ本当に死んじゃう。

「シンリィ、いいから逃げろ！ ルウ！ シンリィを連れて…」

そのルウは、ナーガの手から剣を奪って、シンリィの更に前に躍り出た。

「『腰砕けのおっさん』は黙ってる!」

ヒドイ! 『おっさん』だけでも十分ヒドイのに!!

虎は三人の中で、剣を持つ者に狙いを定めた。四つ這いになってルウめがけて飛び掛かる。

「ルウ!! 頼むから、逃げてくれ!!」

「ギャンギャンうるさい!!」

西風の娘は自慢の脚力で仔狐みたいに跳んで、虎の眉間を蹴飛ばした。そして飛び越し様に、虎の首に剣を突き立てる。

「くっ…!!」

しかし、鎧のような毛皮が剣を弾き返した。辛うじて着地した娘に、怒り狂った虎が立ち上がって爪を振りかざす。

「ルウ——!!」

へ——剣を掲げる……!——へ

頭の中に響いた。

目の前の虎がスローモーションになる。ルウは両肘を伸ばして目一杯剣を立てた。途端、虎の斜め後ろの暗闇から、緑の閃光が飛んで来た。

——キィィィン——!!

剣は光に包まれて、翡翠の輝きを放った。束を通してドクドクと息つき、まるで生き物のようだ。

ルウは夢中でジャンプして、それを振り下ろした。

——ザッシッ……!!

一回転して地面に降りたルウの周りに、粉々に砕けた虎の破片が舞った。それらは下に落ちる前に空中で溶けて消える。

「はっ……」

止まっていた息が、やっと戻った。

あんな、でっかい、魔性の虎を、倒した?! 夢中だったけど、今、身体中に震えが来た。

「あの緑の光のお陰だ」

光の飛んで来た方向を見ると…

「シン…リィ！」

水色の子供が、羽根を広げて立っている。

「お前…、凄いな！ お前の父者に習ったのか？」

当のシンリィはトロンとして、唾然と固まっているナーガの方へゆっくり歩き出した。

「おっさん、大丈夫か？ 呪い、解けたか？」

ルウも駆け寄った。

「逃げろって、言ったのに…」

ナーガは座り込んだまま、ルウを睨み付ける。

「九つの時のあんただったら逃げたか？」

「……………」

口から先に生まれた娘に口では敵わない。

「動けるか？」

「はあ…、ああ、大丈夫、みたい…」

ナーガは首と手をブンブン振ってみた。

「はい、剣、返すよ。ホント、大丈夫か？」

「大丈夫ですって」

「違つよ、蒼の里が…だ」

「……………」

「大丈夫か？ あんたが次期長で…」

「……………返す言葉ありません……………」

〜優しい手〜

「ま、私達の下敷きになって、ダメージ受けていたんだ。気にするな」

九つのルウに気を使われて、ナーガはますます落ち込んだ。

あんな邪(よ)こし(ま)の金縛りにハマるとは、まだまだ、全然、修練が足りない…。

ナーガの前を黄色が覆った。

シンリィが懐から出した実を差し出しているのだ。

「…???僕に…???」

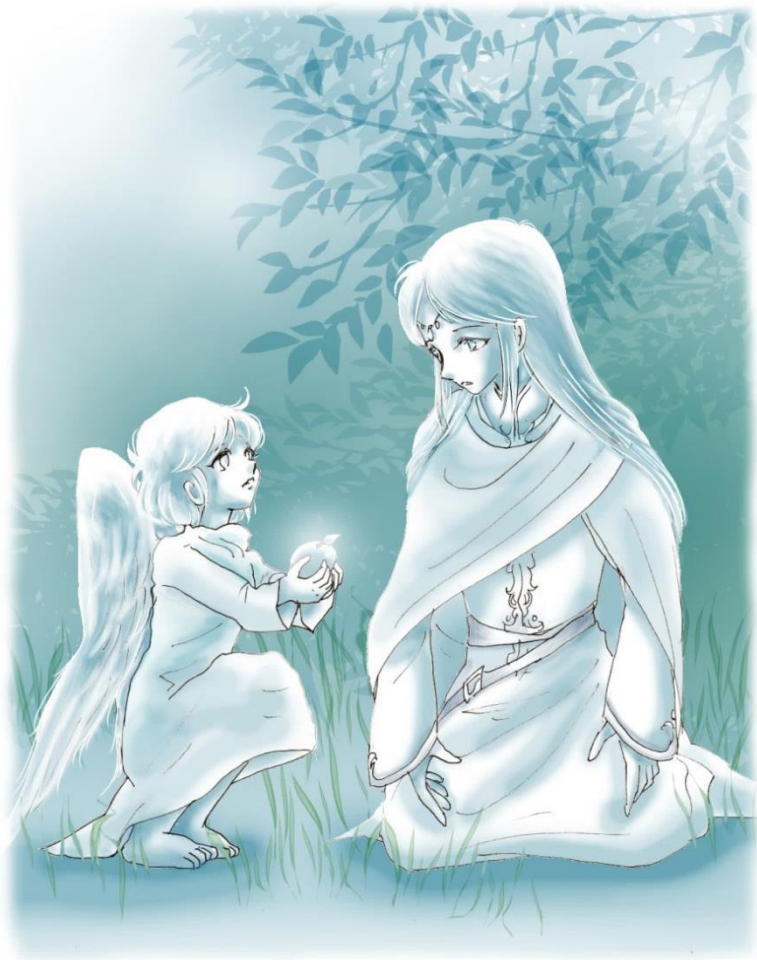
シンリィは大真面目な顔で、ナーガの胸に実をグイグイ押し付ける。

ナーガは戸惑いながら、その実を受け取った。ゴツゴツした

黄色い実…………。

「なに?? なに?? おっさんにこの実をあげる為に、苦労して

ここ迄来たってのか?!」



ルウは目を白黒させた。しかし、ナーガの方を向いて、もつとびっくりした。おっさんは黄色い実を凝視して、めそめそしているのだ。

「な…？ どうした？ おっさん？ どっか痛いのか？」

「え？ ああ…」

ナーガは顔を上げて、指で目尻を拭ぬぐった。

「何でもない…。色々、思い出したただだよ…」

「…ふうん…」

よく分からないが、このヒトにとって黄色い実は、特別に思入れのある物だったんだろう。

そんな感じに納得している所に、目の前に黄色い実がやって来た。シンリィがルウの鼻先にも実を差し出しているのだ。

「わ、私にもか？」

ルウは恐る恐る手を出して実を受け取った。ひんやりするだけで、特別に何か悶(むらめ)く訳でもない。ただ……。

「ルウに、実をあげたかったんだね」

「そうなのか？ 何で？」

「あげたい気持ちに『何で？』もないでしょ」

ナーガは目を閉じて、実に鼻を付けた。ルウも真似して鼻を付けてみた。甘酸っぱい香りと、シンリィのホンワカした優しさ…が、伝わった。

そう、朝はシンリィに触れるとあんなに寒くなったのが、今日一日でだんだん薄れて、今、気が付いたら、すっかりそういのがなくなっていた。不思議だ、今は彼に触れると、嬉しくて暖かな、満ち足りた気持ちになる。

少しの間座り込んでいた三人だが、ナーガが実を懐に入れて立ち上がった。小刀を取り出して、老木の根元の若い枝を切り取る。

「どうするんだ？」

「この木の子供を育ててみようと思って」

「蒼の里で？」

「いや、あそこはこの木には寒すぎる。この辺りでギリなんだろう。上手く根付けばいいんだけど」

ナーガは切り取った枝の一本を広場に植えて、術を唱えた。

そして他にも切り取った数本を、ルウに示して言った。

「これは、西風の里に持って帰って」

「えっ？」

「モエギ殿が、この実を蜂蜜に漬けたのが好きなんだ。シドとソウもね」

「そうなのか？ こんな実、初めて見るのに」

「昔は、妹が、毎年ここに実を採りに来ていた。袋一杯の実を



抱えて、嬉しそうに帰って来たっけ。それで、何日も掛けて、蜂蜜漬けを作っていた」

「…妹？ シンリィの…お母さん？」

ユーフィが、いなくなった後…、収穫するヒトもいなくなっていた。

この木の存在も忘れていた。

この実の香りも忘れていた。

ルウは、遠い目をするナーガを黙って見つめていた。この甘酸っぱい香りに、彼は一杯の想い出があるんだろう。

まだ九年しか生きてない自分は、これからの想い出をこの香りに乗せて行くんだ。

例えば、今日の三日月…。

遠い目をするヒトの横顔…。

優しい子供の、小さな手…。

空からゆっくり、ナーガの深緑の馬が降りて来た。

「もっ、帰っていいかい？ シンリィ」

羽根の子供は味噌っ歯をみせて微笑んだ。

「ルウは？」

「私は、シンリィの手助けしたかったただだから…、それに…」  
「それこそ？」

「何か、満足した。もついいや」

「ふふ…、じゃあ、帰ろうか。まず、ルウを森の外の馬の所へ送るよ。シンリィ、少し待っていられるね？」

ナーガはルウを草の馬に押し上げ、自分もヒトリと飛び乗った。馬は優しくふわりと上昇する。

「えっと…、下敷きになってくれて、ありがと…」

「どう致しまして。こちらこそ、虎から助けて貰った」

「…あの…」

「ん？」

「『おっさん』、って呼び方、嫌か？」

「んー…そもそも『おっさん』ってどこから出て来たの？」

「うんと、小さい頃、母者が誰かをそう呼んでいたんだ。よく覚えていないけれど。あなたに最初に出逢った時、なんだかその風景が浮かんだんだ」

「……………」

「嫌だったら、変えなせ」

「…いや、いいよ、変えなくて」

「いいの？」

「何となく、馴染んで来た。ルウの呼び『おっさん』」

粕鹿毛の所へ戻った時、月明かりに二つの影が踊り、シドとソラの騎馬が降って来た。

「ルウ……！ ルウシエル様!!」

二人、少年みたいな顔をして駆け寄る。ナーガの鷹の通信を受け取り、速攻飛んで来たのだ。

「ごめんさ……」

ルウの罰悪そうな声をかき消して、二人、喚きながら両方から抱き付いて来た。

「緑の閃光が見えて、何があったか」と！

「無事だったあ・あ・あ……良かったあ！」

二人の、目一杯心配する気持だが、素直に伝わって来る。

「……そうか……」

今まで、通じ合えなかったのは、血の薄さのせいじゃない。自分が心に壁を作っていたからだったんだ。

ナーガが再び森に戻ると、シンリィは暗い森に取り残されていたにも関わらず、ニコニコと木の回りをスキップしていた。

「まったく……、最強だな、お前は……」

帰途……、気流に乗って安定して飛び始めると、羽根の子供は疲れが一気に来たのか、ナーガの腕にもたれて眠ってしまった。

「ホント、最強だな……」

ふと気付くと、シンリィの懐が空だ。

「あれ？ もう一つ、自分の分の実を持っていなかったっけ？」

子供は口をホカんと開けて、くうくう寝息を立てている。

「落っこしたのか？ しょうがないな」

目が覚めてグズったら、僕の実を半分こしてやるつ。

後ろでは、シドとソラの騎馬がルウの粕鹿毛を挟んで、説教くれながら飛んでいる。

ルウは黙って素直に聞いている。今晚得たモノに比べたら、それ位お安いご用だ……、そんな顔をして、懐の膨らみに手を添えている。

そうして四頭は、朝焼けに三日月が薄まる空を、緩やかに北へ戻って行った。

〜おしま〜

二〇一〇・三・二八